

「第一章」からの軌跡

——中野重治の転向——

西 澤 正 樹

一 「第一章」まで

中野重治は、作品の側からその人物をとらえることが、なかなか困難な作家であると、私は思う。彼の作品は、告白的要素が一般に強いにもかかわらず、その要素は直接に作品に表れ出るのではなく、その間隙に自意識が幾層にも噛まされて、屈折した形で表白されることが多いからである。中野自身、「僕は告白ということがきらいだ」と書いていた⁽¹⁾。そして私がこれから論じようとしている、転向という「みずから呼んだ降伏の恥」⁽²⁾の中で書かれたいわゆる「転向五部作」⁽³⁾においては、殊にそれが極度な形で現れて、晦渋と屈折と、時にパセティックな叫びとを作品の中に呼び寄せているのである。平野謙は、この時期の中野重治の「倨傲としてしかあらわれ得ないような、柔軟な含羞の心」を鋭く感じ取って、その非告白性を、中野の小説の「非私小説性」と呼んでいた⁽⁴⁾。私はここを踏まえて、中野重治の転向後の営為のうち、第三作目の「村の家」を書くまでの時期について考えてみたい。

中野の転向後の文筆活動は、随筆「村の話」(『帝国大学新聞』昭9・9・17)において再開される。そして中野はしばらくの間、自らの転向については語ろうとしない。中野が再出発の後に自らの転向について触れるのは高名な『文学者に就て』について(『行動』昭10・2)が初めてであって、それまでに書かれた幾つかの随筆・評論のなかで対象とされているのは郷里福井の変化、東北の飢饉、刑務所の蔵書やその中の読書の実態などである。描かれたそれらからは、事細かにデータや具体例を挙げながら、現社会、現日本の記録をしようとする中野の執筆態度が見えてくる。しかしながらここで注目されるのは、芥川を回想した「小さい回想」である。杉野要吉氏は次のように書いている。

芥川がのりこえずに苦悩した日本近代の、自己に投影する社会条件がひそめる「翳り」の正体に、歴史的に、あるいは現実的な視線をあびせ、肉迫することによって、それをのりこえる

道のりをつかみ出そうとしている姿がここにとらえられる。⁽⁷⁾

杉野氏は「小さい回想」(昭和九年十月五日稿)と「イデオロギー的批評を望む」(同年同月七日稿)との連続を、宮本顕治の「敗北の文学」(『改造』昭4・8)の評価の線に見いだして鋭い。中野によれば、「敗北の文学」は、芥川龍之介という文学遺産の「藝術的プラスとマイナス」とを「イデオロギー的に分析している、つまり味わっている」のである。そして、芥川の遺した「ぼんやりした不安」という言葉が、いま「シエスτροφ的不安」として、小林秀雄らによって時を経て再び持ち出されていることをも、中野は批判しているのである。その「イデオロギー的批評を望む」に、中野は次のように書いている。

私はイデオロギー的批評を望む。誤ったイデオロギー的批評については多く書かれた。それだから私は強い強いイデオロギー的批評を望む。「文学する」熱情を説いて文学しない批評や、ゲーテすら時代に制約されたことを説いて詩とは本来その制約性を突破しようとするものであることを説かぬ批評を私は望まない。「生きる」という活動写真のなかの赤軍水兵は、「ただ、ただ、生きたい」という熱情の愚かさに腹をたてて「恥じろ」と叫んでいる。古来の大詩人は「運命」と戦った。あるものは戦い仆れた。それが逆に、「運命」——諸制約と戦うことが詩人の道であることを示している。(傍点引用者)

中野は、芥川のいう「不安」の「出所」がすでに「まずまずわかつている」(小さい回想)という。しかも芥川は「ぼんやりした不安」を表明することで、芥川自身の置かれた「社会的条件」

を「社会的条件のなかにいるもの自身に」によって判然と照らし出す「可能」をつかんでいたと書いている(同)。こうした「プラスとマイナス」が作者自身によって「ぼんやり」と表白され、宮本の「敗北の文学」がそれを取り上げてますます「判然」させたとするれば、宮本の批評は、「詩とは本来その(時代の)制約性を突破しようとするものであることを説かぬ批評」と正反対の「強い強いイデオロギー的批評」として、中野の目に映っていたのである。

しかし私はさらに次のことを言いたい。「強い強いイデオロギー的批評」と書いたこの中野の言葉には、それまでおよびそれ以後の中野の批評にある言葉と違う響きを感じられないであろうか。この言葉に私は、それによって自ら進むべき道を照らして欲しいという、中野の気弱な願いを読み取りたい。プロレタリア文学運動全盛期たる昭和最初期に、時代の波に乗せられて「ゲーテすら時代に制約されたことを説い」たのは、ほかならぬ中野重治自身であつたはずである。⁽⁸⁾この場合の「ゲーテ」がむしろ「小さい回想」における「芥川」の換喩であるのは言うまでもないが、そういう公式論を過去に信じて(あるいは信じようとして)いた中野がここでそれを恥じながら否定し、年若い、しかも現在獄中にいる宮本顕治の批評に「諸制約」とたたかう「詩人の道」を指示す「断罪者」を見ていることが重要なのである。おそらく後年中野を見舞う、非転向者に対する負い目が、早くもここで現れているのだ。想像するに、非転向者を思う心情は、両刃の剣として転向者たる自分を切らないではいまい。転向者たる中野のこの時の胸の内には、「ただただ生きたい」という「熱情」と、その

「愚かさ」に「恥じ」ることが混沌としてあったのであったらう。

こういう羞恥心が触発されて噴出したのが、「イデオロギー的批評を望む」に更に接続する『「文学者に就て」について』ではないか。この論を一口に言えば、板垣直子をはじめとする転向文学者への断罪にたいして、転向を恥じるあまりに「非難に服す」と頭を垂れ、「第二義的生活」⁽⁹⁾と書いた貴司山治に反駁し、「第一義的生活」を書いたものである。この中野の言う「第一義的生活」がなにを意味するかはまことに捕らえにくいのだが、しかしおそらく同様にその倫理的断罪に頭を垂れたであろう中野重治が、頭を垂れたと書かずに、次のように書いたということにそれは集約されてくるはずである。

もし僕らが、みずから呼んだ降伏の恥の社会的個人的要因の錯綜を文学的綜合の中へ肉づけすることで、文学作品として打ちだした自己批判を通して日本の革命運動の伝統の革命的批判に加われたならば、僕らは、そのときも過去は過去としてあるのではあるが、その消えぬ悲を頬に浮べたまま人間および作家として第一義の道を進めるのである。(傍点引用者)

中野が『「文学者に就て」について』の中で、なぜあれほど「弱気」「恥」「消えぬ悲」に拘泥しながら「第一義的生活」を説いたかが、この一節に集約されているはずだ。中野の言う「第一義的生活」が、自らのどうしようもない羞恥心と、「ただただ生きたい」という「熱情」とを、「第一義の道」すなわち「諸制約と戦うことが詩人の道である」というとらえかたで、歯噛みしながら

止揚しようとしたものであることは明白であろう。⁽¹⁰⁾ 中野重治はその「詩人の道」を、芥川の姿に見、また宮本の批評に見、そしてそれを今後の「受取勘定」としてみずからの上に課していこうとしていたのである。中野重治の「転向五部作」をつらぬく軸は、この線の上に位置付けられるのではないかと、私は考えるのである。

二 「第一章」の成立

「第一章」は難解な小説である。この難解さの原因は、第一に人物が四十余人次々に登場して、しかもほとんど彼らについて説明や描写がなされていないこと、第二にそこに扱われている事柄が、やはりほとんど説明抜きであるということが挙げられるであろう。

説明抜きで扱われているということは浅くいえば、説明しなくても通じるような読者をめがけて書かれてもいるということである。当時中野と論争をひきおこした、当の中村光夫も、「第一章」を批判して次のように書いていた。

私小説といふものは主人公である自己が読者に興味がある人間と仮定するのを前提とする。(中略) 昨年来続出した作家同盟の楽屋裏を読んで喜ぶのは、小説からゴシップ種を見つけて騒ぐ一部の読者だけであらう。⁽¹¹⁾

口調はあくどいが、しかしこの中村の論が「第一章」のある一面を指摘していないとはいえないと私には思われる。では中野は、なぜゆえこういう叙述の方法を採ったのであろうか。

「第一章」を年譜の上に置いてみれば、それは『文学者に就て』についてより前の執筆であって、中野がまだ自らの転向については口を閉ざして語ろうとしない時期である。そしてこの「第一章」においても、やはりそれが貫かれていることに、私は注意したい。

「第一章」は、それが構想された時点では、プロレタリア文学運動が興隆した昭和二、三年ころから、転向の時代たる昭和九年前後までを歴史的に「総括」し、来るべき革命運動の「第二章」「第三章」の時代への展望を含みこむようなものとして、中野重治の前にあったらしい。だがそれはおそらく中野の心理的状況的なゆとりのなさのために、実現されずにしまった。だからむしろこの書かれなかった「第一章」の構想の中で、転向が扱われるはずであったという考えはありうるし、だからこそ登場人物にも説明が不足しているのだと考えることもできよう。しかしそれならばなぜ、その「第一章」の続編が書かれず、「鈴木 都山 八十島」が次に書かれたのかということも考えねばなるまい。

「第一章」の続編が書かれなかったのは、書かれてしまった「第一章」の方法に限界があることを中野自身が悟ったからに他ならないと思う。そこに中村光夫の先の批評批判が、中野を打つたと想像されることはいうまでもない。先に引用した論文中、中村が「第一章」を指して人物が生き生きしていないと断じたのにたいし、中野は答えて「私もそう思う。事実そのとおりである」と書いている。人物が生きているか死んでいるかという事柄は、その作家の力量の問題であって方法の問題ではない。力量を批評

家に問われたならば、作家は引き下がるより他に術がないのである。だから問題は、力量の問題を方法の問題としてとらえなおして、自覚的に、書かれてしまった「第一章」の方針を破棄変更して「鈴木 都山 八十島」を書いた、その中野重治の方法意識にこそあるのではないか。

「転向五部作」のライト・モチーフが「日本の革命運動の伝統の革命的批判」にあるのは周知に属するが、「第一章」には確かに平野謙が書いているように、主人公田原の「党グループに対するリゴリスティックな認識」と、「島田のような組織的・人間的存在」への批判とが書かれてある。しかし私が思うに、このライトモチーフが生きているのは前半部であって、小説の途中で田原が検束された後は、彼の獄中闘争ぶりに、「第一章」の描写が変容して行くのである。

田原の孤軍奮闘ぶりを描くことは、「日本の革命運動の伝統の革命的批判」ではあるまい。それが「革命的批判」として生きるためには、田原と検事原田との会話を通じて、その中に、現実の縮図、革命運動の総体の縮図、警察権力機構の縮図とそれが負っている日本帝国主義の縮図、そういうものを描きこんで行かねばならないはずである。しかし「第一章」においては、中野の筆は、具体に執ることからくる田原と原田との、個人対個人の人間的なたたかいにしか及んでいない。

ここで中野重治の眼目は、見たまま知るままに書くということでは当然なのである。具体的事実⁽¹³⁾に執する、ということは、中野が「第一章」を書くにあたって選びとった《方法》であった。

そしてそれについては、「革命運動」を描いた前半部において、例えば『文学新聞』のとりあげた仕事の内容の列挙——上海攻撃、刑務所工場、反戦兵士、敵宣ビラ、凶作、人身売買のことなど——、それらのほとんどは伏字で読み取ることができなかったはずだが、こうして列挙されているというそのことが、事実に執するという『方法』を読者に感じさせる。⁽¹⁵⁾ いやむしろ、こう言い換えたほうがいいかもしれない。先に私は、事実と人物とが説明抜きで次々と現れるために、「第一章」が難解なものとなっていることを述べた。しかし逆に考えて、これらが説明抜きで立ち現れているからこそ、それらが事実であるということがいいようななく強く訴えられてくるのではないだろうか。つまり、説明がないことが逆にこの小説の同時代性^{レバニティ}を強め、作品の受容を緊密にさせるのである。

先の中村光夫の「第一章」批判を思い起こしてみよう。中村は「第一章」には作家同盟内部の「ゴシップ種」を読み取られる危険があって、それがこの小説の「私小説性」なのだと書いていた。しかし説明なく列挙されていく事実（見たまま知るまま）から読者が読み取るものは、事実そのものよりもむしろ、事実^{レバニティ}に執しようとする態度、それが事実か事実でないのかではなく、そこに拘泥せずにはいられない作者の態度なのである。

態度について書くということは、一方で告白小説に陥る危険とたたかわなければならぬ。それは困難なたたかいであろう。平野謙が次のように念を押さなければならなかった事情もそのことによる。

「第一章」や「一つの小さい記録」から主人公の頑張り¹⁶をひきだして、だから、大目にみてくれなどという読者の印象が生まれるとしたなら、それは作者の本意にもとる。

「大目にみてくれ」と作品が訴えているとするならば、その作品は告白を目的としていなければならないまい。しかし中野は「第一章」を、事実にこだわる態度をモチーフとして書き、その方針を堅持して行くことで告白から免れようという、危うい間隙に食い入ることを企図したのであった。そしてそれを持続してゆく力の源泉となったのが、前節で見たような、自らの転向を恥じる気持ちであったのだろう。

先に引用した「イデオロギー的批評を望む」は、「第一章」との執筆年月日が、ほぼ同時期である。「第一章」を前にして、中野が、倫理批評ではなく「イデオロギー的批評を望む」と書いたとき、そこにはずるずると倫理的告白に落ち込みそうになる自分を、高く厳格なイデオロギー的前進によって打ち破ろうという、どうしようもなく気弱であるところの作者主体を逆説的に反転させて表現したリゴリズムがあったのだ。

三 「鈴木 都山 八十島」について

前述のように、「第一章」後半部は、事実に即すという初発のモチーフは貫かれているものの、その獄中闘争は「日本の革命運動の伝統」を逆に照らし返すというようにはなっておらず、政治犯（文学犯人ではなく）と思想刑事との人間的なぶつかりあい¹⁷に偏してしまっている。中野の筆は、例えば「裏の会合」があった

かどうかを田原が知らぬことを、刑事に認めさせようとする場面や、刑事原田の肉体的矮小さなどを描き、それはそれで生彩を帯びてはいるものの、過去の運動や獄外の現在の運動にそれが及んでいるとは言いがたい。唯一のそれは、妻からの差し入れのチヨコレートを包む『文学新聞』を見て、「こういうものな（日付が）無くちやいかんのだ」というところである。

次作「鈴木 都山 八十島」は、こうしたモチーフの逸れを立て直すという意図で書かれたのだと私は思う。「第二章」以下が方法的に続けられなかった所以であろう。しかも中野重治は、その羞恥心と「革命運動の伝統の革命的批判」とを生かす二面のモチーフを貫徹するために、ここで新しい《方法》を編み出した。それは、掘手からという方法である。「第一章」は、検束されるまでの「革命運動」を充分描き切らずに、検束されてからの獄中闘争に筆を移してしまった。おそらく切迫した思いに衝き動かされてのことであろう。それならばそれで、獄中での事実執すること、逆に正面にある警察機構と、その背後にある権力機構とを掘手から照らし返すという方法に切り替えたのであった。

そのために彼は、刑務所新聞「人」について書き、そこに出ていた農村の悲惨な現状について書き、『毎日年鑑』に出ていた皇室御料地について、データをそのまま書き移す形で書き（結局この部分に関するものはすべて伏字にされてしまったのだが）、善良で小心な文学青年の鈴木という補欠看守について書き、「勅語」の文法的誤りについて書き（これはどうしたわけか伏字にされなかった。当局に見抜く力がなかったのであろう。中野の表現の勝

利というべきである）、都山というやはり小心な看守について書いたのだった。これらはみな、田原の閉じ込められている空間と外界とが接触を持つ数少ない線である。

しかもこの小説が「第一章」と最も異なっているのは、矢継ぎ早に事実を繰り出して行く方法を捨て、田原（これは「第一章」の主人公と同じ名である。「第二章」以下の連作形式を捨てながらこの同じ名を使っているところにも、「第一章」との連続と断絶との意図が読み取れよう）という主人公を中心に据えて、その内部と外部とを描いていくスタイルを採っているということである。一個の主人公を据えて、その心理に互りながらその行動を描いてゆくということになれば、自然と《読者》はその主人公に作者中野重治を重ねて読むことになる。そして、次作「村の家」とこれとを較べて見るとき、中野はそこにあまり配慮していない印象を私は受ける。

しかしその答えは容易に出るだろう。この小説は「第一章」と同様、転向を扱っていないからである。そこで私は、次の平野謙の論を誤ったものと考ええる。

孤立した前衛という一種のパラドックスが、たえず田原にはつきまといっている。その独特な党絶対視もまたそこに生ずる。

これは一般には、日本の革命運動全体の観念性によるものだが、特殊には、佐野の無礼は許せるが、佐野の無礼を許すお前自身は許せぬぞ、とみずから叱咤しながらノミをとりあげる「歌のわかれ」の主人公のリゴリズムとオーヴァラップしている。だから、田原は二六時中非人間的にまで緊張を重ねていなければ

ばならぬ。中村光夫が「第一章」の主人公を「理論の土偶」と感じたのも、そのせいである。しかし、非人間的なたえざる緊張は、その緊張ゆえに、いつかは切断されざるを得ない。「鈴木 都山 八十島」における孤独にして狷介なたたかいぶりのピークが、それ自身として、転向の必然を内包していると断ぜざるを得ない所以である。(傍点引用者)

そして平野は、この小説が「転向の必然を内包している」がゆえに、中野が転向を扱った「トップに位置すべき」作品と位置づけている。

この作品に、中野重治の「孤独にして狷介なたたかい」が極度にあらわれているというのは、私もその通りであると思うが、しかし私は、このたたかいが「非人間的」だとは思わないし、「転向の必然を内包している」とも思わない。

平野のこの論は江藤淳にたいする反駁文として書かれている。

江藤は「鈴木 都山 八十島」を指して、「俺はあやまって出て来たが、君達ほうまくやれ」という「通信」「実践的、道德的指令」「暗号文」のごときものと読んだのである。むしろ江藤の論が低俗なものとして退けられるべきであるの言うまでもないが、しかしこの江藤の論が注目されるのは、それがこの小説にたいする作者中野重治のモチーフに言及していることなのである。作家が作品にたいするときのアクティブな面、作品が「読者」にたいするアクティブな面、そういうものが、ここで江藤の視野には入っている。しかし平野の論は、ここを曖昧にしているということができる。平野の論によると、まるで中野は次作「村の家」の転

向を用意するだけのためにこれを書いたのだというかのようである。

私はこの小説に「肉体的なまでの憎悪感を感じている」浦島警部や柳本検事が描かれずに、あえて「人物」が「何となしに軽く思われた」八十島予審判事とのたたかいが描かれていることに注目したい。浦島や柳本やに拷問を受ける場面を書けば、むしろ発禁となるはずであったということはある。しかしここで八十島を描くということは、特別な中野重治の搦手からという方法を意味しているのだ。次の引用を見たい。これは八十島が田原の調査をとっている場面である。

問として、昭和六年十月末か十一月中、日本プロレタリア文化団体聯合が結成されていることは、承知しているか。……これや知つてゐるね? (『知つてゐます。』と田原は答えた。) 答として、はい、承知しております。(傍点引用者)

問として、被告人は、その合法の準備会には、出席していたか。……作家組織の準備員としてこれや出ていたね? (『出てました。』と田原が答えた。) 答として、はい、作家組織準備員として、出席してゐました。(同)

ここで田原の発言は、一貫してカッコにくくられていることに注意したい。そして、このカッコの部分を飛ばして読むならば、私たち「読者」の前には、田原がとられた一枚の予審調査が浮かび上がって来るのである。

この記述の方法は、予審調査がとられる現場と、そしてとられた調査そのものを、その両面において正確な形で写し取ろうと

する動機の反映である。「承知しているか」という「問」は、権力を背景とした高圧的なことばで書かれ、それにはたいして、肉声では「知っています」と答えたにもかかわらず、「答」としては「はい、承知しております」と卑屈なことばで写し取られて行く、この調書の《様式》というものは、明らかに日本国家権力のありようを提示しているのである。

予審調書のことばのありようを「鈴木 都山 八十島」に描き出すというこの姿勢は、中野重治が作家として回復した抵抗の方法に他ならないと思う。中野はこの小説を書く直前、中村光夫に答えて次のように書いているのである。

私の考えを言おう。満州戦争や国会選挙の「出来事を並べるため」に「小説の形式を借りる」必要がないのではない、満州戦争や国会選挙みずから小説とならずにいらぬのである。¹⁹⁾

そしてこれにならうていえば、調書をとられる現場を書くために「小説の形式を借りる」のではなく、調書みずから小説とならずにいられたのであつたのである。これが中野重治が「鈴木 都山 八十島」に託したモチーフであつたのだと私は思う。江藤淳のいうような「通信」のために小説を書いたのではなく、作家としてことばをもって権力にたいしてゆくことこそが、このとき中村光夫との論争から得た大きな収穫であつたのだ。私はこの「鈴木 都山 八十島」を、そういうものとして位置付けたいと思うのである。

この小説における田原のたたかいは、平野のいうように「非人間的」な「緊張」に支えられているのではなく、調書の様式が人

間を「非人間的」に取り扱うことにたいする、人間性の奪回、人間のことばの側からの弾劾であつたのだ。

中野は、「第一章」欄筆後、島木健作の「癩」(『文学評論』昭和9・5)にことよせて評論「戦うことと避けて通ること」を書いてゐる。その中で中野は、島木のプラス面として、「鍵や扉や拷問」をそのものとしてだけ見ずに、「社会関係の総和」としての「人間関係」を見て描いていったことを指摘すると同時に、そのマイナス面として、「作中人物を信念で救うことで、逆に作者自身ある程度作中人物と同様信念に頼つてしまつた」ということを見ている。中野はこの時期、作中人物とその作者との距離ということについて、ひどく鋭敏であつた。例えばまた中野は、盟友窪川鶴次郎の転向小説「風雲」(『中央公論』昭和9・11)にたいして「作者が作中人物に即いてしまつてそれを引きはなしていない」ことを指摘してゐた。²¹⁾ここには、作中人物と己とを重ねて読まれること、つまり告白小説として読まれることへの警戒と羞恥とが働いてると同時に、告白小説がよりかかりがちな「信念」を排し、作家としてことばの側から戦わねばならぬという「イデオロギー的批評」を志したものであるということができよう。

「鈴木 都山 八十島」は、こうして、「社会関係の総和」として留置場の「人間関係」を描くことと、「信念」による政治的ロマン主義ではなくて、リアルなことばによる抵抗と告発とによつて、成立したのである。それこそが、留置場小説が「いわば『社会的な』モチーフのものになりうる」(杉野氏)²²⁾隘路であると、中野に意識されたのであらう。

中野重治が本当に、作中人物と己とを「引きはな」そうとする葛藤を味わうのは、次作「村の家」においてである。そこでは、「第一章」「鈴木 都山 八十島」を書き継いで行く上で沸き起こってきたであろう、そして「鈴木 都山 八十島」においてはよく抑ええたはずの、「信念」による内省と苦しみと自意識とが混沌のまま投げ出されているように見える。中野はしかしそれをそれとして、「信念」を排して、勉強という人物とその社会的位相とを客観的に把握しようとすることによって、それをバネにしていよいよみずからの転向を抜おうとしたのであった。

注(1) 「嘘とまことと半々に」(『文学時代』昭5・2)

(2) 『文学者に就て』について(昭10・2『行動』)

(3) 「第一章」(脱稿昭9・11・8、『中央公論』昭10・1)、

「鈴木 都山 八十島」(脱稿昭10・3・6、『文藝』昭10・4)、「村の家」(脱稿昭10・4・7、『経済往来』昭10・5)、「一つの小さい記録」(脱稿昭10・12・8、『中央公論』昭11・1)、「小説の書けぬ小説家」(脱稿昭10・12・12、『改造』昭11・1)

(4) 平野謙「中野重治著『中野重治随筆抄』」(『現代文学』昭15・9)、「中野重治論」(『文学草子』昭15・7)

(5) 「刑務所に多少の改良を求む」(脱稿昭9・10・7、『改造』昭9・11)、「イデオロギー的批評を望む」(脱稿同日、『文学評論』昭9・11)、「室生さんへ返事」(脱稿昭9・11・4、『文藝』昭9・12)、「刑務所で読んだものから」(脱稿同日、『文化集団』昭9・12)、「風習の考え方」(初

出未詳、昭9・11ごろか)、「この頃の感想」(脱稿昭9・11・12、『東京朝日新聞』昭9・11・29、12・1)

(6) 原題「芥川龍之介氏のこと」、『文藝春秋』昭9・11

(7) 杉野要吉『中野重治の研究 戦前・戦中篇』(昭54・6、笠間書院刊)

(8) 「当時福本イズムの影響下にあった亀井勝一郎の回想記によれば、大正十五年の夏ごろ東大の控え室でルナチャルスキイの『実証美学の基礎』などをテキストとして、中野重治ら若い大学生たちは熱心にマルクス主義芸術論を討論したそうである。そういうとき、ゲーテはプロレタリア文学者より偉いか偉くないかが、きまって問題になったが、『ゲーテだって偉くないさ!』と、きっぱり中野は断言したそうである」(平野謙『昭和文学史』昭38・12、筑摩書房刊)

(9) 板垣直子「文学の新動向」(『行動』昭9・9)、貴司山治「文学者に就て」(『東京朝日新聞』昭9・12・15)

(10) 中野自身のちに「貴司山治の『文学者に就て』を読んで、行きなり『文学者に就て』について」を書いて発表したような早とちりといえることも私はしたが(後略)と書いている。(新版『中野重治全集』第二巻「著者うしろ書曖昧などところのある一つの変化」昭52・4、筑摩書房刊)

(11) 中村光夫「転向作家論」(『文学界』昭10・2)

(12) 「つまりわたしは、千九百二十七八年(昭和二―三年)ごろから三十四年(昭和九年)ごろ、ここに形となった『第一章』のかかれるころまでの問題を『第一章』として総括し、第二章、第三章へと続く日本のある流れをかきたかったのだが、集そのものが示すようにそれは出来ずにし

まつた」(『中野重治選集Ⅲ 第一章』「作者はしがき」昭
23・1、筑摩書房刊)

(13) 「中村光夫氏の『転向作家論』に答ふ」(『文藝通信』昭
10・3)

(14) 平野謙「転向文学と中野重治」(旧版『中野重治全集』
第七卷「解説」、昭34・7、筑摩書房刊)

(15) 中野は「小説の書けぬ小説家」のなかでこう書いてい
る。「……あまり伏字が多いので、高吉自身、それに虚栄
心を感じてやしないかと編集者たちに思われまいか気にな
ったことさえあつた。それは批評家たちの言葉の影響でも
あつた。彼らは書いていた、『高木高吉氏の今月の作品は
あまりに伏字が多いので興味索然とする。氏の妥協しない
態度には立派さを感じもするが、こんにちの作家としても
うひと工夫あつてしかるべきではなからうか。』高吉は苦
笑することはできなかった。彼は『何をいやがる、ぬけ作
め……』と感じる一方で批評家の好意と同情とを強く感じ
た。批評家は誤解しているのだつた。高吉の小説には過激
な文句などは決してなかつた。彼は、妥協しているかして
ないかとなれば、いまの支配者たちにはつきりと妥協して
いるのだつた。ただ彼は、自分が今どう妥協しているか、

どうして屈服するようになったかを書きたかつた」(傍点
引用者)中野はここで、過剰な伏字のみずからの小説に、
編集者の思惑にすら気をまわし、そして敢えて伏字にされ
てもみずからが意図するところを、「妥協しない態度」を
読者に伝えるということではなく、事実執する態度によ
って小説を書くことだと書いているのである。

(16) 平野謙、注(14) 参照。

(17) 平野謙『文学・昭和十年前後』(昭47・4、文藝春秋刊)
(18) 江藤淳「寓話と道徳」(『文学界』昭35・7、『西洋の影』
所収)

(19) 注(13) 参照。

(20) 脱稿昭9・12・29、『文藝』昭10・2

(21) 「室生さんへ返事」、注(5) 参照。

(22) 注(6) 参照。

(付記) 本稿の統編に当たる「『村の家』の成立」「『村の家』論」
を、それぞれ『昭和文学研究』第17集と『文藝と批評』第6巻第
8号とに書いた。ご参照いただければ幸甚である。なお、引用文
のうち中野重治のものについては、新版『中野重治全集』二十八
巻本(筑摩書房)からとし、他は初出によつた。